

自然との関係において

1 私の立場

私は専門家として、このテーマについて論ずる資格を有してはいない。少くとも「宗教」か「文明」か、いずれかに精通している者ではない。私にとって魅力ある西欧人の何人かを細々と研究してきた「職人」ではない。そして「職人」の最大の欠陥は自分の知っているわずかばかりのことを基に他の全てのことを推し量ろうとすることにある。それゆえ、私は沈黙すべきだったのかもしれない。しかし私自身は、平均的頭脳と知識しか有しないにせよ、「職人」のカテゴリーには収まり切れない、現代に生きていく「人間」である。このような「人間」としては与えられたテーマを避けて通ることは出来ない。それゆえ、敢えて発言することにする。

私の見解は陳腐さと誤謬、とりわけ偏見に満ちたものであろう。

石井 忠厚

しかし、だからこそ意味があるとも言えよう。偏見はそれと気づかれないがゆえに偏見なのである。だから偏見は意識化、言語化されることよってのみ、初めて明示され、それから解放されることが可能になる。もし私と偏見を共有されている人々がいるなら、私は彼らの「自由化」にさゝやかな貢献を果せるであろう。

2 「宗教」の語義

私の取りとめのない「宗教」の概念を定着させるために、その語義の詮索を手がかりにしたい。

i 「宗教」の日本語としての意味。

「教」の方はわかる。

「宗」の意味は「字源」によれば、「むね(主)、おさ(長)、首位の者」を指し、転じて「たつとし(尊)、人の尊びて祭る者」の意味をも有するに至った。

「宗教」とは「人々から尊敬されている、ある人物の教え」である。この理解は、確かに、世界の四大宗教と言われているものについては申し分なく妥当する。イエス、マホメット、釈迦、孔子の教えが、それぞれキリスト教、イスラム教、仏教、儒教なのだから。そして彼らの教えは、もちろん、「よい生き方」に関するものである。それらは、彼らの言行録を中核とする「教典」もしくは「聖典」とその注釈集を有している。

だが、「宗教」と見なされているものの全てが必ずしも個人的教祖（「宗」には「祖」の意味がある）を持つていないわけではない、「聖典」を有しているわけでもない。「秘義」に通ずる特定の集団（シャーマン、バラモン等）や或る民族の伝統的「教え」であり、「神話」や「口伝」でしかないこともあり得る。

それゆえ、「宗教」とは、必ずしもその起源は審らかではないが、とにかく、「よい生き方」の典型の教示であり、それに従って「よりよい生」を求めようとする人々が支えている何かである、と取りあえずは言うことが出来よう。

ii 「宗教」の欧語としての意味。

「宗教」の語は、仏教の書物に散見するそうだが、今日、用いられている限りでは、ラテン語の *religio* にまで遡る英仏独蘭語の訳語として明治以降から使われるようになったものである。

religio の意味① ≡ 「畏敬」。ほゞ「宗」の意味の一つ「尊」と重なる。「宗教」には「何か」を「畏怖」するという感情的基盤があることを改めて思い知らされる。この「何か」は、もちろん、「教

祖」や「伝承」でもあるが、しかし、その「教え」そのものが人間以外のもの、人間を越えた存在者の「認知」と「畏怖」を中核として各人の生き方を律することの必要を説いているのである。結局、「よい生き方」の指示は、「聖」のそれなしには成立しない。そして多くの宗教学者が明らかにしているように、「自然」は常に「聖」そのものか、その顕現の「場」として「聖」である。この場合、「自然」の特定の現象や事物を「聖」とするか、「自然」全体をそのように見るかは問わないでよく。さしあたり、「宗教」においては「自然」への「畏怖」の念が大きな力として作用していることだけを確認しておこう。

religio の意味② ≡ 「再結合」。

「宗教」は生まれながらに与えられた人間関係を、一度、破棄して、新たにそれを結び直すことを要求する側面も有する。例えばイエスは言う、「誰でも父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらには自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのだから、わたしの弟子となることはできない」（ルカ一四一―二六）と。そしてこの要求は、いわゆる「高等宗教」の独占物ではない。「未開宗教」もまたイニシエーションの儀式を有しているのだから。「よりよい生」の追求は「与えられた生」の延長上においてなされるといふより、その否定から出発する。結果的に今までの「生」の再認に終ることはあり得るにしても、「与えられた生」とは先ずは、歴史的に条件づけられたそれ、「伝統」であるから、否定の矛先は、しばしば「宗教」そのものに向けられて、「宗教改革」や「新興宗

「教」を生みだすことにもつながり得る。しかし「歴史」の「根底」には「自然」がある。「自然」は「人間」にいかなる「生き方」を命じたのか。こゝで「文明」が問題になる。

3 「文明」の定義

本学会長である斎藤博氏の「文明」は「人間の営みの総体」を出発点にして考えてみることにする。

例えば、ライオンの営みの総体は文明とは言えない。何故か。人間もライオンも生物として何はともあれ生存することを至上命令されている。そして生存に不可欠なのは食糧の確保である。だが、その確保の仕方に根本的差異がある。ライオンは生れつき与えられた身体、能力を頼りに余り当てにはならぬ自然の恩恵による獲物を食べる。その反復しかしていない。従つて、個体の能力、あるいは獲物の減少という事態を前にしてはほとんどなすべを知らない。人間の場合はどうか。彼は先ず自分の植物主義を克服した。次に自分の身体的能力を補完するものとして弓矢・釣り針・網などの道具を工夫した。更に牧畜、農耕によつて相対的に安定し、時として生存に必要な以上の食糧の確保に成功した。この余剰こそ生存にさしあたり汲々しないですむ人々の居住形態としての都市生活を可能にしたのである。「文明」はその「自然」本性が極めて「反自然的」である特異な種としての人類の出現と共に始ると見てよい。

一般に人間以外の生物の営みは、「自然」によつて与えられた条

件に従うそれでしかない。だから彼らの営みは「自然」と一体であり、敢えて「文明」と名づける根拠がない。それに対して人間は自分の自然的与件を変えることに着手した。このゆえに人間の営みは別の名で呼ばれるに値するのである。確かに人間はライオンと基本的行動を生物として共有している。《食べる》、《眠る》、《排泄する》など。だが、これらの行為には《調理》、《ベッド》、《便所》など「自然」ではないものがまつわりついている。「未開」とされている人々すら、その点では「文明人」と変わらない。「未開」と「文明」の差異は程度の問題であつて本質の違いではない。加えて「未開」もしくは「遅れた文明」は必ずしも能力の不足のゆえにではなく、意志もしくは選択の結果であるかもしれないのである。こゝで、「宗教」と「文明」の関係が問題になる。

4 「宗教」と「文明」

いずれにせよ、「文明」は単に生きるのではなく、貪欲なまでに「よりよい生」を求める人間固有の努力の所産であり、その努力の継続である。この意味で、「文明」は2で見た「宗教」と重なり合い、後者は前者の意識的、自覚的延長であると見なすことも出来る。それゆえトインビーを初めとする多くの文明学者が各文明の特色を説明するにあたって、その宗教に最も有力な手がかりを求めたのも無理からぬことである。

しかし「よりよい生」への追求は全て同一方向になされるわけ

ではない。「文明」は言うなれば、様々なベクトルの総和として全体としての傾向が決定される運動体である。

ところで、「文明」の基層には人間の生存のためにその物質的条件を改善するという形での「よりよい生」の追求活動がある。「宗教」もしばしば「呪術」として非合理的な手段を通してではあるが、この動向に同調する。しかし全体的に見ると「宗教」のベクトルは必ずしもこの土台的ベクトルとは一致しない。

「文明」は「自然」への挑戦である。しかし、この衝動は反自然としての「人間」の「自然」自体にも向けられる。「宗教」の本質をなすのはこのベクトルである。なぜなら「宗教」は多少とも「自然」への「畏敬」なしには成立し得ない営みなのであるから。「文明」の「反自然性」はまことに複雑である。それは「自然」一般への「反」であると同時に、「人間的自然」という特殊への「反」でもある。この事情を示す実例を一つ挙げておこう。アイヌ人たちは「熊 \parallel 自然」を殺して自分たちの衣食への欲求を満す一方、「熊 \parallel 自然」を「神」として崇めるのである。要するに、「宗教」は歴史的には、「文明」と「自然」との「調和」をはかるのに大きな役割を果たしてきたのである。だが、今日もなお「宗教」はそのように機能しているであろうか。こゝで「現代文明」の状況が問題になる。

5 「現代文明」と「自然」

「現代文明」は「反自然」の暴走の観を呈している。

人間は自然的条件の改善を自らの生存のために行ってきた。しかし、今、われわれが直面している皮肉な事態は、この改善の努力の結果が生存の条件そのものの全面的否定に至り得る現実を招いた、ということにある。要するに「文明」と「自然」との調和の崩壊であり、「宗教」の機能の破綻である。

6 「現代文明」と「西欧近代文明」

「西欧」の世界支配への野心とその実現可能性の大きかったことが今日の事態を招いた要因である。

「自然」への反逆、従ってその支配・管理への志向は「文明」の基本的志向である。しかし「文明」はこの志向に反するそれとして「宗教」をも抱え込む。結果として「文明」の基本的志向は調和的に果されてきた。

しかし、もし「宗教」が「呪術」的レヴェルとは違った次元で「反自然」に肯定的であった場合はどうか。

「現代文明」が「西欧近代文明」に牛耳られていることは衆目の一致するところである以上、「西欧」の「宗教」、「キリスト教」の検討は不可欠である。

7 「キリスト教」と「自然」

キリスト教もまた「自然」を「畏敬」していたことは確かである。モーセとエトナ山、イエスと《野の百合》。しかし、ユダヤキリスト教的伝統において「自然」への「畏敬」は常に「ヤール

「エ」もしくは「父なる神」へのそれを媒介してのみ成立していることに注目したい。「自然」が「聖」であるのは、それが「神」の作品であるからこそなのである。そして、もう一つ注目すべきことは、この作品中での最高傑作の位置が「人間」に与えられていることである。彼は、そして彼だけが「神の似像」なのだから。「自然」の「聖性」は、かくして、事実上、失われる。「人間」の反自然性Ⅱ「文明」の肯定はユダヤキリスト教に潜在している。この傾向の顕在化を阻止する要因は、もちろん、第一に、「神」への「畏怖」の念であり、それに基づき、「文明Ⅱ人間の営み」の空しさの自覚である。「無からの創造」が可能な「神」は万物の「無化」もよくなし得る存在なのだから。第二に、「砂漠Ⅱ自然」を前にしての人間の事実上の無力である。

だが、キリスト教的西欧の近代では、「砂漠」を「沃土」に変える秘訣を握るに至る。「科学革命」である。西欧は古代地中海文明の知的遺産をほぼ完全に消化し、飛躍へのスタンバイを完了した。ところで、こゝで明確にしておくべきことがある。

「知識ⅡscienceⅡ科学」と「技術」の関係である。両者の間に強度の相関性のあることは確かであるが、「科学」を専ら「技術」へと方向づけたのは西欧近代の一大特色をなしていると言ってよい。「知」と「技」は必然的に結合している、とするのは近代的偏見である。

古代ギリシアは今日の目から見ても高度な自然科学を有していたことは否定できない。だが、そこには、いわば「科学技術」は

なかった。ギリシア科学の実践的応用力が、かなりのものであったことは、アルキメデスの対ローマ軍対策のエピソードが雄弁に語っているが、しかし彼自身は「技」への応用は「知」の墮落であると嘆いているのである。

古代ギリシア人にとって、「自然」に関する「知識Ⅱ科学」の増大・深化は、「自然」を制御する力の強化と直接的には結びつけれど、「自然」への「畏敬」、「驚嘆」に直結していたのである。「科学」は「祈り」、人間の有限性の再確認の営みであった。

それゆえ、「科学技術」、テクノロジ―は近代西欧の発明であり、その背景には、キリスト教に潜在していた「自然」の脱聖化と「人間」中心主義の顕在化がある。

8 「宗教改革」の意味

「科学革命」に先立って、西欧は「宗教改革」を経験した。この「改革」は、確かに、キリスト教の純化として、この宗教の危機を切り抜ける側面を有していた。しかし、他方で、キリスト教の「文明Ⅱ反自然」の暴走を抑制する機能を著しく弱めることにもなったのである。

中世キリスト教も、もちろん、聖書の教義を中核にしていたが、その実践的適用にあたっては極めて柔軟であった（この姿勢がプロテスタントにとっては墮落と映ったのであろう）。「教会」は多くの異教的要素を、キリスト教的衣装をまとわせつゝも、抱容した。例えば、地母神崇拜がマリア信仰のかたちで容認されたよ

うに。このような土壌の上に聖フランシスコの自然讃歌が唱われるのである。逆にプロテスタンティズムは聖書中心主義に徹しすぎて「自然」の聖性の剝奪を完成してしまった。

このような文脈のもとに、「科学革命」のイデオログ、F・ペーコンは、「人間」のみが *Daijnago* である、という教義に立脚して、「人間」を地上における神のマネージャー、「自然」の管理者、支配者と規定するのである。これは「自然」への干渉を「人間」の義務・権利とすることにつながり、「文明」の一傾向の正当化、「科学」と「技術」の結合の目的化の宣言でもある。

ペーコン的展望においては、「文明」と「自然」の調和は、「神」への「畏敬」を支えとしてはかられることになる。聖書によれば、「神」は、全てよし、とされたのであるから、彼のマネージャー「人間」は被造物全てを温存する義務を背負い、自己中心主義を禁じられる。

だが、プロテスタンティズムは、最も肝心な「神」を「人間」から遠くするという本来の意図に反する結果を招く種を自らの内に宿していた。「神の死」の用意である。

異教的要素の完全な排除は、偶像の破壊というかたちをとって、聖像・聖画・薫香などの「神」の臨在の劇場にふさわしい舞台装置を「教会」から取りはらい、「神」への「畏敬の念」を直接的、感覚的に体験する道を塞いでしまった。「神」は今や印刷された聖書の文字の中に封じ込まれてしまった。そして聖書解釈は原則的には個人の自由であるから、その意味では「神」の方が「人間」

の操作の対象と化したと見られないでもない。これを補って「神」を体験する道としては、ほとんど、「祈り」しか残されていない。だが、特殊な天分を有する人々を除いて、どれだけの人が呼べど答えぬ対象に向っての呼びかけの行為を実質的に生きられるだろうか。「祈り」は形骸化した「習慣」に容易に転じ得る。

プロテスタンティズムのやり過ぎは、他にも種々指摘できるが、あえて、もう一つだけ挙げれば、修道院制度の廃止（ルター派は復活）に踏み切った点であろう。これは「万人祭司説」の当然の帰結ではあるが、聖俗の区別の消滅である。カルヴィニズムの間全体を修道院と見なす立場は、意図としては、「俗」の「聖化」であるが、これが、実際には、「聖」の「俗化」に容易に変わり得ることはヴェーバーの研究の指摘する通りである。要するに、キリスト教の「文明」のあるヴェクトルへのチェック機能が衰弱化する方向を辿ると同時に、西欧は人類史上かつてないほどの自然への干渉の力を有するに至ったという「悲劇」が生じたのである。

その上、西欧はテクノロジの全世界への輸出を行った。そしてこの文化的輸出は暴力的背景に「黒船」のもとになされた。自衛上、各文明は、テクノロジの採用に踏み切らざるを得ない。かくして「宗教」は歯止め役割を果す暇を持たなかったのである。

9 「現代文明」と「宗教」

西欧キリスト教の特殊性、その他の地域の自衛反応によって、

「宗教」の「文明 \parallel 反自然性」への抵抗は機能していないというのが現状である。この現状打破の力として、今なお、「宗教」に期待できるであろうか。

私は否定的である。

もともと、「宗教」は、とりわけ「高等宗教」は、ある弱点を抱えている。その「知恵 \parallel よい生き方の指示」が絶対的であるというかたちでしか提示されていないという点である。

「文明」は「よりよい」を求める運動であつて「最もよい」に安息するものではない。これが「文明」的にしか生きられない「人間」の宿命である。この運動に「最善」の指示によつて静止を命ずるかたちでの「宗教」は反文明的である。「改革」や「新興」もまた、単に改新された「最善」の教えなのだから。

「文明」という運動体のその都度の方向性を与え得るものとしては、最も純粹に、「よりよい」を目指す、意識的営みしかあり得ないであろう。

こゝに、ピロソピアとしての「哲学」が思い出される。「人間」には「知恵」の所有は許されず、だからこそ、その愛求が、絶えざるやり直しが「人間」の「知恵」のあり方である（この姿勢が、ギリシア的自然教、そして人間の有限性の自覚と密接であることは言うまでもない）としたあの営みが。

「現代文明」は危機に直面している。反自然としての人間のあり方が根本的に問われているわけである。絶対的処方としての「宗教」にその解決を求めることは、上述の理由により、「文明」の自

殺行為である。

われわれの緊急課題は、「愛知 \parallel ピロソピア \parallel 哲学」の出発点に戻つて、「汝自身を知れ」を実行すること、「人間のあり方 \parallel 文明」の自覚としての文明知、結局は文学の確立にある。但し、この学の確立とは、体系のそれではなく、運動のそれである。「文学」は「哲学」であつて、「人間の営みの総体」の不断の意識化をその本質とする。

それぞれの研究者は、自分の専門知をますます深めるべきである。それは「人間の営み」のある具体相を明らかにする試みだから。だが「総体」への志向を忘れないようにするという困難な課題から逃れることは出来ないというのも改めて知らされる事実である。